

## 地域情報 (県別)

### 【大分】働き方改革の一環として「医師も当直を夜勤にして翌日は昼から帰宅する」制度を導入 – 是永大輔・中津市民病院長に聞く ◆Vol.2

2019年9月9日 (月)配信 m3.com地域版

中津市を中心とした北部医療圏で唯一の公立病院で地域医療支援病院である中津市立中津市民病院長の是永大輔氏に、地域医療支援病院の要件見直しについての考え、地域医療連携ネットワークの現状、患者満足度向上の取り組み、人材育成や働き方改革への取り組みなどについて聞いた。(2019年7月22日インタビュー、計2回連載の2回目)

▼第1回は[こちら](#)

#### ——将来的に救命救急センターになる意向はありますか。

この地域に3次救急、たとえば高度救急救命センターなどのニーズはあると思いますし、県の方からも地域医療構想では超急性期の増床が必要と言われます。ですが、ただでさえ人が足りない中で、ICUやCCUの増設、麻酔医の確保、手術する夜間スタッフの確保など、3次救急の要件を満たすことはやはり無理があると考えています。ですので、現時点では自分たちにできることをしっかりとやる、つまり2.5次救急ぐらいまでの役割を着実に担うというスタンスで今後も進めていきたいと考えています。



病院長の是永大輔氏 (病院提供)

#### ——地域医療支援病院の申請を行う際の地域の方々の反応はいかがでしたか。

私は福岡市の市民病院にずっと勤めていたのですが、地域医療支援病院の申請を行う際には、周辺の病院などから「公的な病院がそんなことをするべきではない」とか、「自分たちの病院の方がより適任だ」とかいろいろなことを言われました。ですが、この地域でその機能を果たせるのは当院しかありませんので、「ぜひ地域医療支援病院になってください」という感じでした。だから、それに見合う働きをしなくてはいけないなといつも思っています。

もちろん、地域医療支援病院の要件に見合うだけの紹介もたくさんありますし、医療機器の共同利用も進めています。地域連携の勉強会や公開講座も開催しています。義務感だけではなく、どれだけ地域に役に立つことができるか

という使命感をもって取り組んでいくべきだと考えています。

#### ——医師少数区域への医師の派遣を義務付けようといった意見も出ているようですね。

いわゆる地域貢献のための医師の派遣という意味では、当院も適宜行っています。検診の支援、肢体不自由な小児診療など、中津市周辺からの支援要請が多いですが、他の医療圏に支援に行くこともあります。ただ、地域医療支援病院に医師少数区域への医師の派遣を義務付けるとなると、当院はただでさえ医師が足りていないので本来の急性期医療が回らなくなります。

その医師の派遣という要件に対してなんらかの公的補填があれば発想としては悪くないと思います。ただし、災害がいい例ですが、いろんなところから派遣の依頼が重なった場合にどう調整するのか。それと、形式的に支援に行くだけで中身が伴わなかったら意味がありません。若い医師の多くは高度・専門医療を経験してレベルアップができるということで当院に勤務して来ているわけですから、診療所への派遣ばかりを行うこともできません。地域や病院によっても応援の状況や診療内容が異なると思いますので、そのあたりも十分に考慮して議論してほしいですね。

#### ——地域医療連携ネットワークは活用していますか。

現在、中津市が臼杵市の「うすき石仏ねっと」をモデルに市内外の関係者や関連業種の方たちと話し合いを進めているところです。これは中津市だけの問題ではないので、周辺の自治体も含めて、定期的な会合の中で議論が進められています。「九州周防灘地域定住自立圏共生ビジョン」という構想があり、そのビジョンの中で地域医療連携ネットワークについても話し合いが行われています。

#### ——患者満足度向上の取り組みについて教えてください。

がんサロンや医療・福祉相談などはもちろんやっていますが、当院では院長自らが対応する「無料健康相談室」を設置しています。まだインフォームドコンセントが浸透していない時代に、私の恩師が福岡の病院で「院長のセカンドオピニオン」を無料で行っていて、非常に評判が良かったのです。「自分が院長になったら何かそういうことができなかなあ」とずっと思っていました。

ただ、都会だとインターネットを利用するお年寄りが多いので流行るのだらうと思いますが、この地域はまだまだなので利用者は年に数件程度です。中津市内の患者さんの利用よりも外部の方の利用が多いようです。口コミや病院のホームページを見て相談室に申し込みをし、目的や相談内容が適当であれば対応します。診療科に直接行った方がよさそうな場合はそのようにお伝えすることもあります。私と1対1で30分程度話をするのですが、皆さん、リラックスして話をされていますね。

この活動は、患者を増やすためではなく純粋なサービスとして行っています。小さな試みですが、徐々にその効果も出てくるのかなと思っています。無料なのであまり多くなると大変ですが、やがては就労支援などにもつなげていければいいなと思っています。

#### ——人材育成についてはいかがですか。

当院は人材育成を非常に重要視しています。幸いなことに、研修医は3年連続でフルマッチングの状況です。以前は当院の知名度はあまり高くなかったのですが、最近は九州大学や大分大学から来てくれるようになりました。

職員の育成に関しては、私は情報の共有が一番大切だと思っています。副院長、センター長、看護部長、事務長と、毎朝8時半から30分の会議を行っています。さらに、部長クラスの職員20数人が集まって、週に1回火曜日に30分の会議を行っています。こうした会議では、私の基本的なメッセージ、現在の状況、医療状況などについて話をしますし、戦略マップやBSC（バランススコアカード）を用いて話すこともあります。それらの資料は全部電子カルテのトップ画面で見ることができます。今年度の目標や、私が院長に着任した際に作った「5つの約束」なども見ることが

できます。

要するに、私のポリシーや望むことをわかってほしいので情報共有を大切にしています。そして「今は面倒くさいと思うかもしれないけど、皆さんは幹部候補生ですから必ず分かる時が来ますよ」という気持ちで常に情報交換を行っています。これが私の人材育成法と言えるかもしれません。

#### ——働き方改革についてはいかがですか。

医師の働き方改革については、当院は2交代制勤務という非常に特徴的な制度を導入しました。すなわち、労基署は「当直の医師は電話当番をするだけで、基本的に患者を診てはいけなない。もしも当直で夜間に患者を診る場合は時間外労働費を支払う必要がある」という考え方で、それに対応した形です。

看護師は夜勤と日勤に分かれており、夜勤の翌日は非番で帰宅しますが、「その仕組みを医師にも導入できないか」ということで「当直を夜勤として、その翌日は昼から帰る」制度にしました。また、研修医は特別に朝から帰るようにしています。

こうした試みは大分県内では当院だけだと思います。県内のいろんな病院がこの制度について聞きに来ています。

もちろん、経費もかかりますが、なんらかの改革を進めないと医師たちは疲弊してしまいます。そのような病院にはしたくなかったのですが、そこは先行投資をして働き方改革を進めることにしました。この制度は医師たちには大変好評で、人気が出て研修医の確保にもつながっています。

#### ——今後の目標や予定について教えてください。

足元をしっかりと見据えて、当院の規模でできることをしっかりとやっていくということにつきます。救急も緩和も市民が求めている医療を実践してきました。今後は、中津市だけではなく24万人の医療圏の基幹病院として完結できるようにしていきたいですね。私は豊後高田市出身で、この県北地域は私の故郷です。小倉や大分にいかなくても頼りになる病院を作って行きたいと思っています。

当院に着任して、心臓外科、歯科口腔外科、緩和ケアセンターなどを新たに作りましたが、今後は診療内容のさらなる充実に務めていきたいと思っています。そのためには人も必要ですし、他の医療スタッフの理解を得ることも必要です。いろんな診療科ができてくると労務管理もますます難しくなりますが、うまく協力していきたいと思っています。

例えば「5月の10連休をどうするか」という問題が生じたときに「市内の開業医の先生方のお休みが多くなるので、当院の日勤医師を3人から4人に増員して待機させ、重症患者や救急搬送を受けられるようにしよう」と職員に提案しました。若干の抵抗はありましたが、多くの職員は理解してくれて10連休のうちの5日間、それを実行することができました。結果として連休中のベッド利用率は高まり、その効果はありましたし、医師会の先生たちからも一層頼りにされるようになりました。



中津市民病院の全景 (病院提供)

◆是永 大輔 (これなが・だいすけ) 氏

1980年に九大医学部を卒業後、消化器外科医の道を志す。約30年間、主に福岡市内の大学病院や福岡市民病院に勤務した後、2016年に中津市立中津市民病院院長として郷里の大分県に帰る。中津市立中津市民病院は大分県北～福岡東部24万人医療圏で唯一の公立病院であり、「この地域に住む方が高度医療で困ることのないようにしたい」という思いで取り組んでいる。

【取材・文＝堀 勝雄】